

万葉集の「根」

— 借訓字を中心に —

宮川 晴加

はじめに

万葉集の表記は「音字」と「訓字」に大別され、訓字はさらに「正訓字」と「借訓字」に分けられるが、その区別は必ずしも明確ではない。橋本四郎が「仮名であると共に意義表象を喚起し易い」と述べるように、借訓字でも字義が意識されていると思われる表記は多い。その表記の技巧性に着目したのは井手²である。井手は三種類の「掛け詞」「連鎖型」「含蓄型」「物名型」の「源流」が万葉集中に見られるとし、特に「含蓄型」は表記された文字面から掛け詞と捉えうるものがあると述べた。それは万葉集の「ある語句の表記に他の部分の表現と関連して連想される意味を表わす仮名」を多用する性格によると続けている。近年では澤崎文が、集中において表記例の多い「訓仮名の主要字母」は「字義を意識させない」ために選択されたと論じた³。また「喪」のように表記例が少ないものは字義への意識が強いとも述べている。

このように万葉集の表記は様々な角度から研究されてきた。しかし一つの文字を万葉集全体から取り出し使用の傾向をみる調査は少ない。本論では「根」に注目して、借訓字として使用される場合に字義は意識されているのか、また全体的

に見て「根」は字義を意識して表記されているのかを考察する。「根」は字義が明確で正訓字としても借訓字としても相当数の用例が存在する。かつ、ネの一音節を表わす借訓字は他にないため、音字でない「根」を仮名表記において選択する意図を探るのに適していると思われる。

『万葉集総索引』単語編・漢字編及び『校本万葉集』⁵⁾によれば「根」が使用されている歌は全部で二二一首、そのうち一首の中で二度使用されている歌が七首あり、合計で二二八例となる(稿末資料参照)。内訳は正訓字が四八首・五一例、借訓字が一七首一七例、その他が五八首六〇例である。これらの「根」を正訓字、借訓字、分類が困難なもの(枕詞、地名、その他)に分け、歌意や他の文字の意義との関連を調べる。なお、イハネなどの接尾語は正訓字とする(理由は後述する)。なお、万葉集本文の引用は『原文万葉集』⁷⁾による。また、先述した二二八の用例のほかに巻第五「沈痾自哀文」本文でも一度使用されているが、これは漢文のため考察の範囲に含めない。

一、正訓字の「根」

まずは「根」の字義を確認する。大漢和では次のように説明されている。⁸⁾

①ね。④草木の、地下に在って養分を吸収する部分。(中略)⑤もと。よりどころ。事物の本原。(中略)⑥はじめおこり。(中略)⑦物の下の方。ねもと。(中略)⑧ねざす。もとづく。(中略)⑨ねだやしにする。

①④の意味で用いられるのが正訓字の中心的な例である。また、万葉集においては②や③のような動詞の例は見られない。次に、接尾語「根」について述べる。時代別では次のように解説されている。⁹⁾

接尾語として、名詞に直接、あるいはガを介してつく。大体、生えているもの・地についているものの意の名詞に接し、それゆえ根の名詞的意味を保っているかどうか決めにくいことが多い。

時代別の指摘する通り、イハネなどの接尾語ネに「根の名詞的意味」が含まれているか否かは判別し難い。しかし、大漢和の「根」の字義①、②、③は提示している接尾語にも通ずると言えよう。よって、ここでは正訓字とみなしておく。ただし、イモナネの接尾語ネは別語と考えられるため借訓字として後の章で考察する。

植物の根の用例は二二例あり、うち一八例で具体的な植物の名が七種類見られる。スゲ、マツ、ムラサキ、ヤナギ、クス、ムロノキ、ツマムの七種である。中でもスゲ・スガ（巻三・三九七、他六例）、マツ（巻一・六六、他四例）、ムラサキ（巻一〇・一八二五、巻一四・三五〇〇）の三つは例が二つ以上ある。特にスゲ・スガとマツは枕詞スガノネ・マツガネノが存在しており、根に着目されることが多かったと言えよう。「楊」（巻一三・三三二四）と「室木」（巻三・四四八）は一つしか用例が無いが、それぞれ他の歌でネモココを導いている例が見られる（巻九・一七二三、巻一一・二四八八、表記は「廻香樹」）。後の章で詳しく述べるが、これは「連鎖型」の掛詞と指摘できる。そのため根に着目されてもおかしくない植物と言えよう。「葛」（巻三・四二三）、「都万麻」（巻一九・四一五九）も用例が一つしかない。しかし、葛は「二云」の部分で使用されており、都万麻は孤例であるため、根に着目されやすい植物とは言えない。対して、具体的な植物でない例は四つある。「木根」（巻九・一七五三）と「草根」（巻一・一〇、他二例）である。ただし、「草根」はクサネと読むかカヤネと読むかを歌意から判断する時があり、カヤネとする場合は「かや・すすきなどの、屋根をふく草」（時代別）と解釈されることもある。

接尾語の用例は二七例ある。最も多い用法はイハネ或いはイハガネ（石根・磐根）である（巻一・四五など。全て合わせて一三例）。次に多いのは「眉根」（巻四・五六二、他九例）、次いでヤマトシマネ（巻三・三〇三、同・三六六）、「垣根」（巻一〇・一九八八）と「屋根」（巻四・七七九）は一つずつ見られる。これらは「屋根」を除いて「生えているもの・地についているもの」である。また「眉根」「垣根」「屋根」は現代でも使用される語句なので、ある程度浸透していた用法と言えよう。

ここで植物とも接尾語とも判断し難い例にも触れておく。三三七四番歌と三三三一九番歌に見られる「根延門」である。この二首の該当部分には少しの差があれども、ほぼ同じなので三三七四番歌を挙げる。「石根乃興凝敷道乎石床突根延門叫」(巻一三・三三七四)と詠まれ、新編全集では「岩床は未詳。根延フという述語から、根を張り広げる或る種の植物と考えられる」と解説され、新大系では「岩が根」からの縁で「根延へる」といったのであろう」と推測されている。⁽¹⁰⁾

先述したように植物の「根」の用例はほぼ植物の名が明らかになっている。それらの中には根を歌われても不自然でないといと推測できるものがあつた。ここで万葉歌に見られる植物から「根」を見てみたい。万葉歌の中で多く歌われている植物として、ハギ、ウメ、タク、ヌバタマ、マツ、アシ、ススキ、サクラが挙げられる。⁽¹²⁾ それらのうち、「根」が歌の中で使われている例のあるものは、ハギ、ウメ、マツ、アシであつた。しかし、正訓字の「根」が見られるのは、マツとアシのみである。つまり、「根」はどの植物とも相性の良い文字ではなく、そこに特徴があるものに用いられる向きがある。

二、分類が困難な「根」

枕詞と地名の表記には正訓字や借訓字に近いものもある。しかし語源や語義が明らかでない場合が多い。そのため正訓字や借訓字とは別に章を立て考察する。また、正訓字とも借訓字とも決めがたく、かつ枕詞でも地名でもないものも(三三)で取り上げる。

(一) 枕詞及び序詞にみられる「根」

「根」を表記に用いる枕詞はスガノネノ・マツガネノ・アシノネノ・アカネサス・タラチネノ・サネカヅラ・アリネヨシ

の七つで、うち五つが植物と関連している。これらをネに「根」を必ずあてるもの、ほぼ「根」をあてるもの、そうとは言い難いものの三つに分け考察する。また序詞ヤマスガノネノについてもここで触れる。

スガノネノ（巻四・五八〇、他八例）、マツガネノ（巻二・三〇四七、他二例）、アシノネノ（巻七・一三二四）は全ての用例でネに「根」があてられている。この「根」は文字通りの意味で使用されているため、枕詞だが正訓字の表記であると見える。また序詞のヤマスガノネノも三つある用例の全てで「根」が使用されているため同様のことが言える。

ほぼ固定的に「根」を当てるものにはアカネサスとタラチネノが当てはまる。アカネサスは集中で一例ある。アカネの表記は「赤根」（巻二・一九九、アカネサシを含め他七例）、「茜」（巻二・一六九、巻六・九一六）、「安可祢」（巻一五・三七三二、巻二〇・四四五五）、「茜草」（巻一・二〇）と「根」を用いた例が多いことがわかる。しかし、「根」を用いた例について、ただちに正訓字的な表記とはみなし難い。語源が不明だからである。「赤根」を「正訓であつてアカネの根に赤色色素が多量に含まれ、これが植物の語源となつた」と捉えるものもあるが、「中古頃まで色名・染色名に用例がないことから、「赤+ね」「明+ね」（「ね」は接尾語あるいは「根」）、または「赤丹」をとる説もある¹⁴⁾と説明されるように根が語源になつたと断定できない。タラチネノは集中に二四例あり、うち一七例で「根」が用いられる。井手は「用例の大半が借訓仮名よつて固定的に書き表されていることば」の一つに「垂乳根・足乳根」を挙げている。「根」を含むタラチネの表記は多い順に、「足千根」（巻一・二三六四、他六例）、「垂乳根」（巻九・一七七四、他四例）、「足乳根」（巻七・一三五七、他二例）、「帯乳根」（巻三・四四三、巻一三・三二五八）で、「根」のない表記では「多良知祢」（巻一五・三六八八、他七例、ただし或本歌も含める）がある。よつて井手の指摘は「根」に関する限り認められる。しかし、かかり方が不明で語義が未詳とされるため、「根」が固定的に使用される理由は不明であり、正訓字的な表記とは言い難い。

先述した二つのグループに当てはまらない例はサネカツラとアリネヨシである。サネカツラの例は集中で二つしかなく¹⁶⁾「狭根葛」の表記は巻二・二〇七番歌のみである。この歌では形容詞マネシの連用形マネタに「根」が使用されている

ため、詳しくは次章で述べる。しかし、マネクの表記が他の訓字主体表記歌巻のものとは異なっている点、植物を表わす語が表記に見られる点、柿本人麻呂の泣血哀慟歌である点から、「根」の表記に意図を見出せる。「ありねよし（在根良）」（巻一・六二）は狐猟かつ未詳語で「対馬にかかる」（時代別）とされる。これについて「アリネは高く現れている嶺の意か」（新編全集）という意見や、「対馬の険しい山々を「在り嶺よし」と称えた語」（新大系）という推測がある。他の使用文字の中に「根」と関わりのあるものは見られない。ところでアリネヨシに対する諸注釈を信用するなら、「嶺」を用いた表記でないのはなぜであろうか。「嶺」は集中二二首で使用されている字である。あえて「根」が選択されている点に意図を感じる。以上をまとめると、スガノネノ・マツガネノ・アシノネノの群は必ず「根」が使用されている点から「植物」＋「根」という形そのものが枕詞と言えよう。これは序詞やマスガノネノにも同様のことが言える。一方、ほぼ固定的に「根」をあてている群は「根」を用いるべき理由があるのかもしれない。しかし、それぞれ語源や語義、かかり方に不明な点があるため、なぜ「根」が固定的に用いられるのか説明できない。これらの二つの群にあてはまらないサネカヅラ・アリネヨシは集中でもあまり見られない例に用いられたことが分かり、両者とも「根」の表記に意図があるように見える。

（二）地名にみられる「根」

地名の用例は全部で六例あり、そのうち二例が「嶺」を表している。この二つは地名ではなく借訓字とも捉えられるが、「（引用者注・嶺）の多くの用法はアヒツネ・サガムネのように、地名と結びつくか、アダタラノネ・フジノネのようにノを介して地名と結びついて山名となるか」（時代別）と解説されるため地名とする。

「根」以外の植物を表わす漢字が表記に用いられているのは「阿胡根能浦」を歌った巻一・一二番歌と「青根我峯」を歌った巻七・一二〇番歌のみでともに「野」が使用されている。¹⁷しかし「野」は集中でもしばしば用いられる字であり、今

回は「根」と同様に地名での使用である。ノシマは七つの用例のうちの全てに、ミヨシノは三二の用例のうち三一回に「野」が使用されており、それが定着した形であったと言えよう。従つて、「野」と「根」の両方の字義を意識した表記でないと言える。一方で他の四例、「雲根火」の含まれる巻一・一三番歌、「筥根」の含まれる巻七・一七五番歌、「築羽根」あるいは「筑波根」と表記される巻三・三八三番歌、巻八・一四九七番歌では植物に関する語を見いだせなかつた。以上のことから、地名に見られる「根」は字義をあまり意識されていないとわかる。

(三) その他

正訓字・借訓字のいずれとも決めがたく、かつ枕詞でも地名でもない語にはネモコロ・ネモコロゴロとハネカヅラがあてはまる。ネモコロは語源が、ハネカヅラは語義が未詳のため、それぞれ複数の説がある。

ネモコロあるいはネモコロゴロは集中で五例ある(巻四・六一九、巻九・一七二三、巻一一・二四八六或本歌・巻一三・三二八四、巻一八・四一一六)。「ねもころ」について時代別は「ねんごろ」に。心をこめて。丁寧に。つぶさに。見ル・思フ等を修飾することが多い。ネモコロゴロニとも」と説明し、語源について二つの説を挙げている。

語源を①根⇨モコロ(如しの意。↓もころ)とも、②根⇨モ⇨凝ともいう。③はくモ(二)という形で構成されることが多い、くがくするほどの意の副詞句として、足モアカガニ・夜モスガラ等の同類とみ、動詞凝ル(四段)に係づけるのである。ネモコロゴロニとも使われるのは、当時の語感が④であつたためであろうが、モコロは上代でもすでに活発に使われた語ではなく、実際の語源はいずれとも定まらない。

集中では、ネモコロに正訓字「懃」「惻隱」「懃懃」もあてられている。それらを避け「根モコロ」とするのはなぜか。

ネモコロは先述した枕詞スガノネノ・アシノネノ、序詞ヤマスガノネノに係る語である。それ以外にも「難波乃菅之

根毛許呂尔⁽¹⁷⁾（巻四・六一九）「川柳乃^{かはぎの} 根毛居侶雖見^{ねもころみれど}」（巻九・一七二三）など植物が「ねもころ」に係る例もある。これらは井手の指摘する「連鎖型」の掛詞と言えよう。また、萩野了子⁽¹⁸⁾は鈴木日出男⁽¹⁹⁾の論をふまえ、「掛詞式序詞」の例として植物と「ねもころ」を挙げ、「類音繰返し」の序詞とその接合部分の用語が一致している「共通点を持つ」と説明している。また巻一二・二八六三番歌、同・三〇五一番歌にも触れ、「同音を繰り返して連結させた序詞にも同様の関係を見出すことができる」と述べている。萩野論は序詞のみについて述べているが、この主張は枕詞にも当てはまる。例えば巻一三・三二八四番歌は枕詞スガノネノから始まる歌で、「菅根之^{すがのね} 根毛一伏三向凝呂尔^{ねもころ}」と表記される。スガノネノ・ネモコロの両方に「根」が使用され、植物から別の意へ転換したことが表記で示されている。三二八四番歌が最も端的な例であるが、それは他の植物から導かれる「根モコロ」にも言えることであろう。このように示すため「根モコロ」の表記が存在するのではなからうか。つまり語源に関わりがあるからではなく、遊びの要素として「根」が使用されているとも考えられる。

「はねかづら（葉根縷）」二例（巻四・七〇五、同・七〇六）は、他にも「波祢縷」（巻七・一一一二、巻一一・二六二七）と表記される。現在の研究では「年ごろになつた少女の髪飾⁽²⁰⁾」であること、「いずれも「はねかづらいまする妹」の形で、少女から大人への境界にある女性の初々しさ象徴する。あるいは当時の成女式の習俗の一つ⁽²¹⁾」とされることは共通した見解である。しかし、材料など具体的な部分については複数の意見が存在している。仙覚抄では「ナト、ネト同内相通」として「ハナカツラ」と解釈されている。これに対し契沖は「花ヲハネト通ハシ云ヘル例ナシ」と批判しており、「此ハ髪ノ飾ニハネタル物ナトノ著ケタルヲ」言つたと捉えている⁽²²⁾。攷証は両者を批判的にとらえ、「いろいろの紙をいと細く裁たるにて、鳥の羽に似たりともいはる、物なり。されば、古しへ、鳥の羽などを少女の飾としたるにて、羽かづらの意にはあらざる歟」と主張している⁽²³⁾。全釋には「埴輪土偶に、大きな鳥の羽を附けたものがある。恐らくこれであらう⁽²⁴⁾」とあり、全註釋には「鳥の羽を繚にするもの。また菖蒲の葉や根をにして五月五日に戴くものともいう⁽²⁵⁾」とある。伊藤博は「羽毛で作った髪飾り⁽²⁶⁾」とし、阿蘇瑞枝は成人女性の髪飾りとされる点から、「花かづら、もしくは葉を飾ったかづらが現実的

あるように思う⁽²⁸⁾と推測している。以上から、これらの考察の多くが「波祢縵」よりも「葉根縵」からなされているとわかる。未詳の語義を、訓字を用いた表記から考察するのは当然かもしれない。しかし、現代に伝わっていない言葉だからこそ、表記を語義に結び付けるのは慎重に行うべきである。

分類できない「根」が含まれる語句は、語源や語義が未詳とされる。しかし、共に植物に関連のある推測が存在する。それは「根」が表記に使われている点から端を発している可能性があり、字義が語義の解釈に影響を与えていると言える。だが、未詳語の語義を文字面から考察するのは軽率である。

三、借訓字の「根」

借訓字（全一七例）を、名詞の一部に使用されるものと、形容詞の一部に使用されるもの、助詞とその一部、助動詞に使用されるもの、イモナネ、の四つに分けて考察する。

(一) 名詞の一部に使用されるもの

名詞の一部に使用される例は二つで、「根都古具佐」(巻一四・三五〇八)と「弥不根」(巻一八・四〇四五)が当てはまる。この二例は音字主体表記歌巻に書かれている。

ネツコグサは未詳の植物であるが、おきなぐさとする説が有力である。『万葉集古義』では「彼の国富士の麓の、海に出たる岬を、三浦崎と云り、又そのあたりにて、白頭翁をねこ草といへり、ねこぐさ、やがて根つこ草なるべしと云り」と説明されている⁽²⁹⁾。この「白頭翁」がおきなぐさのことである。これを受けてネツコグサは「女の譬え。おきなぐさであれ

ば（中略）、四、五月頃に咲く暗赤紫色の可憐な花は、形態においても女性を連想させるに充分（釋注）と解釈されたり、「ねつこ草」の「ね」に「寝」を掛けて、下句の「相見」を起こす比喩の序詞としたもの（全歌講義）と解釈されたりしている。未詳ではあるものの、植物の名に「根」が使用されているため、字義が意識されていると指摘できよう。また同じ歌に植物を字義とする「芝」が見られる。しかし、「芝」の含まれる第一句（傍線部）は「第二句、又は第三句につづく、枕詞のやうに見えぬことはない」、⁽³⁰⁾「その用字法から地名」（注釋）と推測されるものの場所は不明である。「芝付之」も「根都古具佐」も不明な部分があるが、「芝」と「根」は共に植物を意味する字なので、あえて同じ句のうちに使用された可能性を指摘できる。

「弥不根」は「御船」の表記の一つである。一字一音表記において「御船」が歌われるのは六回で、うち「美布祢」は四回（巻一五・二六五六、同・三七〇五、巻一八・四〇六一、巻二〇・四三三三）、「美敷祢」（巻一八・四〇五六）「弥不根」はそれぞれ一回ずつ表記される。旧大系は「不の仮名は、巻十八では、特殊な個所にだけ見える文字。訓仮名の『根』も同様。一般的には祢（ネ）を使う」と指摘している⁽³¹⁾。また、訓仮名として「見」が使用されるのも珍しいことである（新大系）。さらに、同じ句に見られる「支」も「万葉集中、巻十八の特別な群にだけ見られる仮名」（大系）とされる。これらの解説の「特別な群」とは「かなり大規模な補修が行われた」（大系）ことが明らかになっている箇所を指す。このように四〇四五番歌は補修を行った箇所に記載されているため、本来の表記でない可能性がある。また、この歌には「麻」が含まれている。植物を意味する字だが、これは特に一字一音表記で多く用いられる文字である。よって字義を意識して使用されることが少ないと推測でき、今回は植物と関連のある語とは言えない。よって、歌意とも使用されている漢字とも「根」との関連は見いだせないと言えよう。

名詞に使用される「根」は音字主体表記歌巻で使用されていること以外に共通点はなかった。また、三五〇八番歌では「根」の字義と関わりのある語を見出せたが、四〇四五番歌では見出せなかった。それは四〇四五番歌が修復された歌である可

能性が高いためと考えられる。

(二) 形容詞の一部に使用されるもの

「根」が形容詞の一部に使用されているのは巻二・二〇七番歌のみである。この歌は第二章第一節でも述べたように、枕詞の「狭根葛」にも「根」が使用されている。

形容詞マネシの連用形マネクを「真根久」と作る。「まねし」は「度重なる。しげしげと多い」(時代別)の意を持つ。集中に一〇例ある語で、表記は「数多」が六例(巻二・一六七、他五例)、「麻柝久」が三例(巻四・七八七、他二例)で「真根久」は一つしか見られない。「数多」は訓字主体表記歌巻で、「麻柝久」は音字主体表記歌巻でしか見られないので、それぞれ固定的に用いられていると言える。つまり一字一音表記の「真根久」が音字主体表記歌巻でない巻二で見られるのは特殊であると言える。この歌ではそのあとに枕詞「狭根葛」が続く。マネクとサネカヅラが一緒に歌われるのは当該歌のみのため、「根」が二度用いられているところに表記の意図があるのかもしれない。また、「根」が二度使用されているだけでなく、「管」や「黄葉乃」など植物と関連している語が歌の中に見られる(資料傍線部)。さらに、これは「柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に泣血哀働して作りし歌二首短歌を并せたり」の一つで、死がテーマとなっている。ここで「根」から「死」が連想される可能性を指摘したい。記紀にみえる「根堅州国」や「根国」については、「黄泉の国」あるいは「死後の世界」を指すとする説が有力である(時代別)。「根堅州国」を「黄泉の国」とする説には異論もあるものの、死者を土中に埋葬していたのは確かであり、歌意とも関わりのある表記とも言えよう。

(三) 付属語またはその一部に使用されるもの

助詞とその一部、および助動詞の例は二三例あり、三種類に分類できる。希求の終助詞の「ね」、打消助動詞「ず」の已然形の「ね」、願望の助詞「がね」の「ね」に分けることができ、一三例のうちの一一例で希求の終助詞の表記に使用されているのが確認できる。

助詞「ね」は「他に求める意の助詞」(注釋)、「希求の終助詞」(新編全集)と解される。また禁止の意を持つ「なくその後に来ることも多く、一一例のうち五つに見られる。その場合は「下手に出て禁止を願う語法」(釋注)などと解説される。これらのうち、植物を意味する語が正訓字として表記される歌は七つある(卷一・一、卷七・一三四七、卷一〇・二〇九七、同・二二一六、同・二二二五、卷一一・二三五一、同・二五一九)。これらは正訓字の性質から、歌意も植物に関わるものであると言える。ただし、二五一九番歌で歌われる植物「真木」は「真木乃板戸」として詠まれている。そのため植物が歌意に関わるが、植物そのものではない。また、植物を表す語が地名・枕詞として用いられている例も二つある(資料破線部)。一六八〇番歌は地名として「木」(紀伊)・二三六四番歌は枕詞「足乳根之」で「根」が使用されている。対して、「根」以外に植物の文字が表記に用いられていない二二三番歌の例もある。二二三番歌は「露に寄する八首」の一つであり、これらに分類される八首のうち五首で「芽子」が見られる。しかし、この歌では「芽子」は見られない。

一方で本文異同に関わる例もある。卷六・一〇二〇、一〇二一番歌である。この歌は解釈により異なる校訂がなされている部分が多くあり、多くの問題点を抱えている。今回は「根」と関連するもののみを取り上げる。この歌は罪を負って鳥流しにされた愛しい男が無事に元の国へ帰れるように、と祈る内容である。諸注釈では、歌意も使用される文字も全く植物と関わりを持たない。しかし、諸本では傍線部「莫管見」が「草管見」に作られ、「根」との関連を指摘できる。この「莫管見」とする誤字説は、本居宣長が『玉勝間』で「同集六に草管見身疾不有とよめる、草といへるは、かのから書

の草居云々の説によれるか、と思ふ人もあめれど、然にはあらず、此草字は、莫の誤れるにて」と述べたことから始まった。⁽²²⁾現在多くの注釈書（全釋、注釋、釋注、新編全集、新大系）がこれを支持しており、主流の解釈といえる。これが支持される理由として、ツツミナクという例が三つあるのに対し「クサツツミ」の語は他にないこと（注釋）が挙げられる。一方で、『玉勝間』より前に著された賀茂真淵の『冠辞考』には「草づゝみ」の項目があり、「やまひ」の枕詞として「旅の草むしろにありてふ蟲の名冠らしめたり」と説明されている。⁽²³⁾誤字説を支持しない注釈書では「枕詞と見えるが語義が明かでない」（私注）という解釈や、「今原文のままとするが、明證はない」（全註釋）、というものが見られる。また、「草管見」に対してもさまざまな推察があり「ツツミは災難に逢つて物忌するをいう。それのないのは無事の意になる。クサを冠したのは、旅行の災難の意からであろうか」（全註釋）、「瘡即ち外疾かとも考へられないことはない」（全釋）などがある。「草」が誤字でないとすれば、この歌も植物を表す文字を含んでいる例に数えられる。

願望の助詞ガネのネに「根」が用いられているのは巻九・一九〇六番歌のみである。「梅花」を詠んでおり、表記にも歌意にも植物が関わっている。願望の助詞「がね」は集中に一四例あり、訓字主体表記歌卷では当該歌以外の全てで「金」に作られる（巻三・三六四、他七首）。なかでも巻一〇・二三二九番歌は、一九〇六番歌と同様に「梅花」を歌っている。そのため一九〇六番歌は植物を歌っているため「之根」と表記したとは断じ難い。なお、「之」が一つの歌で異なる読み方で二度使用されている理由も不明である。

打消の助動詞ズの已然形での使用は巻二・二三番歌のみである。この歌には植物に関するものは見られない。しかし、「根」が使用されている「多香根者長寸」のあとに「妹之髪」と続くのは意図的なものであろう。「根」と「髪」は細くて長いという共通点がある。そのため妻の髪のをさまを連想させる比喩としての役割を「根」が担っている可能性がある。したがって、歌意と「根」の字義は関連していると言えよう。

助詞・助動詞に「根」があてられている歌は、植物を表す語を、正訓字として用いる場合、借訓字として用いる場合、

どちらも場合の三つに分けられる。とは言え、正訓字・借訓字として植物の文字が用いられている例がほとんどであったため、「根」が用いられるのは意図的であると考えられる。また植物の文字が見られなくても、形態が類似するものを比喩的に表わしていると推測できる例があり、こちらも語義が意識されていると言えよう。

(四) イモナネで使用されるもの

最後にイモナネについて述べる。これは巻九・一八〇〇番歌が該当する。接尾語とも捉えられ、時代別では「ナとネを単に愛称の接尾語とみるのは、ナネの単独の用法もあり、類語ナセもあり、無理であろう」と解説される。よって、第二章で挙げたイハネのような接尾語とは異なる。そのためこちらで取り上げる。

ナネは時代別では「親しい女性を呼ぶ語。男性に使われることがある」と説明され、用例に万葉集と神武記「那泥此二字汝命⁽³⁴⁾」を挙げている。澤瀉は「女に対する愛称で、ここは妹につけていとしい妹の意に用ゐたものと思はれる」(注釋)と述べている。また阿蘇は七二四番歌の解説で「ナは古い一人称の代名詞。後に二人称に転用。肉親に対して親愛の情をこめた呼びかけ」(全歌講義)と述べている。集中で確認できる「なね」は「名姉」(巻四・七二四)のみで、イモナネの形は一つしか見られない。

この歌で「根」に関わりがある語として、第二句にある「麻」が挙げられる。先述した巻一八・四〇四五番歌の考察において「麻」は音字として表記されることが多いことを指摘した。しかし、一八〇〇番歌においては正訓字として表記されている。よって植物を表す語として挙げるべきであろう。また、「紐緒」のように根と形状が似ているものも歌われる。この歌は題詞に「足柄の坂を過ぎしときに、死人を見て作りし歌一首」とある。先述したように「根国」が「死後の世界」(時代別)を表すと考えられるので、「根」は死と関わりのある語と言える可能性がある。そのため、歌意とも関わりを認めうる。

以上をまとめると、借訓字「根」が字義を意識して使用された歌が多いのは明らかである。全一七例のうち一三例が、植物を意味する文字とともに表記されていたためである。また、根の形態や他の文献からうかがわれる同時代の一般的なイメーヂが利用されていると推測できる例もあった。植物を意味する文字は正訓字の用法ばかりではないが、その字義と「根」との間に連想が働くとすれば、その例もまた「根」の字義を意識していると言えよう。加えて、助詞の「ね」にあてた例が多いことにも注目したい。これは訓字で表記することを重視したため音字を避けて借訓字を選んだとも考えられる。一方で付属語に音字の多い歌のなかで借訓字が使用されている場合もある。その例については字義の意識を指摘できよう。

四、万葉集における根

訓字表記と音字表記のネを比較し考察に加える。ネの音字表記には「柵」や「泥」、「年」などが存在する。今回はその中で最も例の多い「柵」を取り上げ、比較対象は「根」と「柵」が共通して見られる語句にとどめる。

「柵」は集中で二八六首、三六四例に使用されている。うち、二六〇首はいわゆる音字主体表記歌巻に書かれている。「根」と「柵」の両方を表記に用いている語句は一五語ほどある。^③

「柵」の用例は次のとおりである。アカネサス（巻一五・三七三二、他二例）、イハガネ（巻一五・三六八八）、イハネ（巻一七・四〇〇六、他二例）、クサネ（巻一四・三四七九）、タラチネノ（巻一五・三六九一、他五例）、ツクハネ（巻一四・三三五〇、他七例）、ネモコロゴロニ（巻二〇・四四五四）、ネモコロニ（巻一四・三四一〇、他二例）、ハコネ（巻一四・三三六四、同・三三七〇）、ハネカツラ（巻七・一一二二、巻一一・二六二七）、マネク（巻四・七八七、他二例）、ヤマトシマネ（巻二〇・四四八七）の三二例が確認できる。また「根」と同様に助詞や助動詞に用いられることもあり、用例数

は四〇を超える。これらはおよそ九二首にわたって確認でき、うち訓字主体表記歌巻でみられるものは一二首である。また、自立語の表記ではマネク以外のものは「柵」を用いた例が「根」を用いた例より少ないことがわかる。特にイハネなどの接尾語は六例しかないのに対し、正訓字の「根」は二七例もあることに着目したい。

以上から、万葉集の「根」は表記全体で見ても字義を意識されて用いられることが多いとわかる。なかでも借訓字の「根」は植物を表す文字が同じ歌のうちにはほぼ存在していた。また、植物を示す文字が無い場合でも、根のイメージが利用されていると推測できるものもあつた。さらに、ネモコロに「根」をあてた例では、この表記を用いることで連鎖型の掛詞として植物から自然に別の言葉へ繋いでいるのを分かりやすくしていると推測できた。加えて、イハネなどの接尾語の「根」は正訓字が圧倒的に多く見られ、字義が表記に反映されていると言える。

よって、「根」は字義を意識して使用されている可能性が高いことがわかる。少なくとも、字義が意識されることを許容した表記であるといえる。ただし、訓仮名ネに対し音仮名ネについては十分な調査ができなかったため、今後の課題としたい。

注

- (1) 橋本四郎「訓仮名をめぐつて」『万葉』三三三号、一九五九年一〇月。
- (2) 井手至「掛け詞の源流」(『遊文録 国語史篇二』、一九九九年一月)。初出は『人文研究』二二巻六号、一九七〇年三月。以下、井出の引用は同論文による。
- (3) 澤崎文「万葉仮名の字義を意識させない字母選択―『万葉集』における訓仮名を中心に―」(『日本語の研究』第八巻、一号、二〇一二年)。以下、澤崎の引用は同論文による。
- (4) 正宗敦夫『万葉集総索引』単語編、漢字編(平凡社、一九七四年五月)。

- (5) 『校本万葉集』(岩波書店、一九三一年七月～三二年二月)。
- (6) このうち五例に本文異同があり、一例に脱字がある。しかし、いずれも単純な誤脱と言えよう。『校本万葉集』によれば、次のとおりである。
- ▼ 卷四・六一九番歌は元暦校本と金沢本では「恨」と表記されている。
 - ▼ 卷九・一八〇番歌は神田本では「根」と表記されている。
 - ▼ 卷一一・二五一七番歌は嘉暦傳承本では「眼」と表記されている。
 - ▼ 同・二五一九番歌は類聚古集では「恨」と表記されている。
 - ▼ 卷一八・四〇四五番歌は温故堂本では「提」と表記されている。
 - ▼ 卷一〇・二二五三番歌は脱文となっている。ただし元暦校本と類聚古集では補われている。
- (7) 『原文 万葉集』上・下(岩波書店、二〇一五年九月、二〇一六年二月)。ただし、私見により断りなく改めたところがある。
- (8) 諸橋轍次『大漢和辞典』六(大修館書店、一九五七年二月)。
- (9) 『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂、一九六七年二月)。本文では略称の「時代別」を用い、これ以降の引用は本文に(時代別)と記す。
- (10) 新編日本古典文学全集『万葉集』①④(小学館、一九九四年五月～九六年八月)。本文では略称の「新編全集」を用い、これ以降の引用は本文に(新編全集)と記す。
- (11) 新日本古典文学大系『万葉集』①④(岩波書店、一九九九年五月～二〇〇三年一〇月)。本文では略称の「新大系」を用い、これ以降の引用は本文に(新大系)と記す。
- (12) 山田卓三、中嶋信太郎『万葉植物事典』(北隆館、一九九五年一月)。
- (13) 木下武司『万葉植物文化誌』(八坂書房、二〇一〇年一〇月)。
- (14) 『万葉ことば事典』(大和書房、二〇〇二年一〇月)、「あかねざす」の項(井上さやか執筆)。
- (15) 前掲注(14)書、「たらちねの」の項(瀬間正之執筆)。
- (16) 本文として引用している『原文万葉集』では卷一一、三〇七一番歌でも「さねかづら」と読むとしている。しかし、この部

分の本文には問題があるため、今回は確実にサネカヅラと読むものを挙げる。

(17) 一二番歌は第二句に「野島波見世追（のしまはみせつ）」と表記され、一一二〇番歌は初句に「三芳野之（みよしのの）」と表記される。

(18) 萩野了子「掛詞の表現構造」（『東京大学国文学論集』八巻、二〇一三年三月）。

(19) 鈴木日出男「掛詞の成立」（『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇年）。

(20) 澤瀉久孝『万葉集注釋』（中央公論社、一九五七年一月〜七七年六月）。これ以降の引用は本文に（注釋）と記す。

(21) 前掲注（14）書、「はねかづら」の項（小川靖彦執筆）。

(22) 仙覚『万葉集註釋』（『万葉集叢書』第八輯、臨川書店、一九七二年一月）。

(23) 契沖『万葉代匠記』（『契沖全集』第一巻、岩波書店、一九七三年一月）。

(24) 岸本由豆流『万葉集攷証』（『萬葉集叢書』第五輯、臨川書店、一九七二年一月）。本文では略称の「攷証」を用いた。

(25) 鴻巣盛広『万葉集全釋』（秀英書房、一九八七年四月）。本文では略称の「全釋」を用い、これ以降の引用は本文に（全釋）と記す。

(26) 武田祐吉『万葉集全註釋』（角川書店、一九五六年七月〜五七年十二月）。本文では略称の「全註釈」を用い、これ以降の引用は本文に（全註釈）と記す。

(27) 伊藤博『万葉集釋注』（集英社、一九九五年一月〜二〇〇〇年五月）。これ以降の引用は本文に（釋注）と記す。

(28) 阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』（笠間書院、二〇〇六年三月〜二〇一五年五月）。これ以降の引用は本文に（全歌講義）と記す。

(29) 鹿持雅澄『万葉集古義』六（国書刊行会、一九二四年）。

(30) 土屋文明『万葉集私注』（筑摩書房、一九六七年〜一九七七年）。本文では略称の「私注」を用い、これ以降の引用は本文に（私注）と記す。

(31) 日本古典文学大系『万葉集』四（岩波書店、一九六二年五月）。本文では略称の「旧大系」を用い、これ以降の引用は本文に（旧大系）と記す。

(32) 本居宣長『玉勝間』（『本居宣長全集』一、筑摩書房、一九六八年五月）。

(33) 賀茂真淵「冠辞考」(「賀茂真淵全集」八、続群書類従完成会、一九七八年六月)。

(34) 中村啓信「新版 古事記」(角川ソフィア文庫、二〇〇九年九月)。

(35) 地名は正訓字か借訓字かを判断しがたい例であると三章で述べた。しかしツクハネの例では「根」は「嶺」の借訓字と言えなくもない。そのように捉えると、「相模祿」(巻一四・三三六二)のような例も「根」と「祿」のいずれもが表記に用いられている例と言える。しかし、今回は完全に一致する語句を挙げ、おおよその数を確認することとした。

資料 万葉集の「根」用例一覧 本稿で検討する順に掲載する。「根」を太字「根」を含む句全体に網掛けをして示す。

一、正訓字の「根」

スゲ・スガ(七例)

奥山之おおくみの磐本菅乎いはもとすげ根深目手ねふかめ結之情むすぶにころ忘不得わすれかね衰

(巻三・三九七)

足日本能あしひの石根許いしねこ其思美そのみ菅根乎すげね引者難ひきばたみ二等に標耳曾結焉しめのみそがむす

(巻三・四一四)

千鳥鳴ちどりな其佐保川丹そのさくはがに石二生いしに菅根取而すげねと之努布草そのぬふくさ解除而益乎とけゆるりよ…(巻六・九四八)

真鳥住まどり仰名手之神社之のうなての菅根乎すげね衣尔寄付いれかけ令服兒得ゆるこども

(巻七・二三四四)

春日山々かすひのやま高有良之たかありの石上いしの上菅根得見尔すげねとみ月待難つきまち

(巻七・一三七三)

奥山之おくみの石本菅乃いしのもとすげ根深毛ねふか所思焉そのみ吾念われを妻者つま

(巻一一・二七六二)

宇奈波良乃うなばら根夜波良ねよばら古須氣ふるすけ安麻多安礼婆あまのあにば伎美波和須良酒たみはわら和礼和須流礼夜わらわら

(巻一四・三四九八)

マツ(五例)

大伴乃おほとも高師能たかしの疾乃はや松之根乎のまつね枕まくら宿梓家之所よすが原由ゆゑ

(巻一・六六)

真木葉哉まきは茂有良武しげあり松之根也のまつね遠久寸とほくさ言耳毛ことのみ名耳母吾者なみみ不可忘わすれ…(巻三・四三二)

住吉之岸之松根すまのきの打曝うらひ縁来浪之ゆかり音之清羅ねの

(巻七・二一五九)

珍海ちみづ浜辺小松はまべ根深ねふか吾恋度われを人子ひと妬ねた

(巻一一・二四八六)

須美乃江能すみの波麻末都我根乃なまの之多婆倍互の和我見流乎努能わら久佐奈加利曾祿くさ

(巻二〇・四四五七)

ムラサキ(二例)

紫之根延むらさきの横野之よこの春野庭はるの君乎きみ管管を鶯名うら葉は

(巻一〇・一八二五)

牟良佐伎波根乎むらさき可母乎布流か比等乃ひら兒能ら宇良我奈之家乎うら祢乎ね遠敵奈久尔とほ

(巻一四・三五〇〇)

楊(二例)

三雪零みゆき冬朝者ふゆ刺楊さし根張梓矣ね御手二み所取賜而と所遊と我王矣わら…

(巻一三・三三三四)

葛(二例)

黃葉乎わが折掉頭跡を延葛乃の弥遠水よ一云い田葛良乃の弥遠長尔よ…

(巻三・四三三)

室木(二例)

磯上丹いそ根室室木ねむろ見之人乎み何在い登間者のぼ語將告可を

(巻三・四四八)

都乃麻(二例)

磯上之都乃麻乎いそ見者み根乎延而の年深有之とし神左かみ備尔家里を

(巻一九・四一五九)

木根(二例)

熟尔汗可伎奈気う木根取き嗚鳴登う室上乎むろ公尔谷見者を…

(巻九・二七五三)

草根(三例)

君之爾母きみ吾代毛所知哉を磐代乃を岡之直根乎を去来結手名を

(巻一一・一〇〇)

見津見津久米能若子我伊触家武 穢之音根乃 于卷惜袂
容鳥之間無數鳴 春野之 草根乃繁 恋毛為鴨
〔卷一〇・一八九人〕

イハネ或いはイガネ (三例) ※は「根延門」の例でもある (二例)
真木立 荒山道平 石根 禁樹押藤 坂島乃 朝越座而して
〔卷一・四四五〕

如許 恋乍不有者 高山之 警根四卷手 死奈麻刀呼
〔卷二・八六〕

吾恋流 妹者伊座等 人之云者 石根左入見手 名積来之 吉雲曾無寸
〔卷二・一一〇〕

汝恋 妹座等 人云者 石根引見而 奈積来之 好雲叙無
〔卷二・一一三〕

鴨山之 警根之 卷有 吾乎鴨 不知等妹之 待乍将有
〔卷二・一一三〕

足日不能 石根許其思美 昔根乎 引者難三等 標耳曾結焉
〔卷三・四四四〕

神左振 警根已凝數 三芳野之 水分山乎 見者悲毛
〔卷二・一四二二〕

石根 重成山 雖不有 不相日數 恋度鴨
〔卷二・一四二二〕

隨処 沢泉在 石根 通 念 吾 恋者
〔卷二・一四四三〕

石根 夜道不行 念跡 妹 依者 忍金津毛
〔卷二・一四四三〕

隱津之 沢立見尔有 石根 徒毛 遠而念 君尔相卷者
〔卷二・一四九〇〕

※為須部乃 田付叫不知 石根乃 興凝數道乎 石床笑 根延門叫
〔卷三・三二七四四〕

※：將為須部乃 田度伎乎 不知 石根之 許凝數道之 石床之 根延門
〔卷一・三三三三九〕

〔眉根一 (一〇例)〕
無暇 人之眉根乎 徒 合搔乍 不相妹可聞
〔卷四・五六二〕

月立而 直三月之 眉根 擡 氣長恋之 君尔相有鴨
〔卷六・九九三〕

眉根 削 鼻鳴紐解 待哉 何時見 念 吾
〔卷二・一四〇八〕

希得見 君乎見常社 左手之 執弓方之 眉根 擡 礼
〔卷二・一四〇八〕

眉根 擡 下言借見 思有尔 去家人乎 相見鏡鴨
〔卷二・一四二五七五〕

或本歌曰 眉根 擡 誰乎香得見跡 思存 氣長恋之 妹尔相鴨
〔卷二・一四二六二四〕

一書歌曰 眉根 擡 下伊布可之美 念有之 妹之 容係乎 今日見都流香袂
〔卷二・一四二八〇八〕

眉根 擡 鼻火紐解 待 八方 何時時毛 將見跡 恋来吾乎
〔卷二・一四二九〇三〕

五十殿寸太 薄寸眉根乎 徒 合搔管 不相人可母
〔卷二・一四二九〇三〕

青柳乃 細眉根乎 咲麻我理 朝影見都追 嬌婦良我 手尔取持有
〔卷二・一四二九二九〕

ヤマトシマネ (二例)
名細寸 稲見乃海之 奥津浪 千重尔隱奴 山跡之 根者
〔卷三・三三〇三〕

〔網津海乃 手 二卷四而有 珠手次 懸而之 努權 日本船根乎
〔垣根一 (二例)〕

箭之 往来垣根乃 宇能花之 厭事有哉 君之不來座
〔卷一〇・九八八〕

〔屋根一 (二例)〕
板蓋之 黒木乃屋根者 山近之 明日取而 持將参来
〔卷四・七七九〕

二分類於困難な「根」
(一) 枕詞および序詞にみられる「根」
スガノネ (二例)
足引乃 山尔生有 昔根乃 勲 見卷 欲君可聞
〔卷四・五八〇〕

不欲當云者 將強哉吾背 昔根之 念 乱而 恋管母持有
〔卷四・六七九〕

奥山之 警影尔生流 昔根乃 勲 吾毛 不相念有哉
〔卷四・七九二〕

不明 公平相見而 昔根乃 長春日乎 孤悲渡鴨
〔卷一〇・一九二二〕

相不念 妹哉本名 昔根乃 長春日乎 念 晚幸
〔卷一〇・一九二四〕

昔根 惘隠 君 結為我 紐緒 解人 不有
〔卷一・一四七三〕

昔根之 惘 妹尔 恋 西 益 十 男 心 不 所 念 覺
〔卷一・一四七三〕

昔根之 惘 隱々々々 照 日 乾哉 吾 袖 於 妹 不相 為
〔卷一・一四七五七〕

淺葉野 立 神古 昔根 惘 隱 誰 哉 吾 不 恋 或 本 歌 曰 誰 野 尔 立 志 吾 比 龜
〔卷二・一四八六三〕

垣津旗 開 沢生 昔根之 絶跡 也 君 之 不 所 見 頃 者
〔卷二・一四八六三〕

相不念 有物乎鴨 昔根乃 勲 戀 吾 念 有 良 武
〔卷二・一四八六三〕

昔根之 根毛 一 伏 三 向 凝 尔 尔 吾 念 有 妹 尔 縁 而 不
〔卷二・一四八六三〕

高山乃 伊波保尔 於 布流 須我乃 根能 祢 母 許 吾 其 尔 尔 布 里 於 久 白 雪
〔卷二〇・四四五四〕

マツガネノ (二例)
神左備而 藏尔生 松根之 君 心 者 忘 不得 毛
〔卷二・一四〇四七〕

天地丹 思足 帶 乳 根 笑 母 之 養 蚕 之 眉 隱 氣 衝 渡 吾 恋 心 中 少 人 舟 言 物 西
〔卷一三・三三三五八〕

不有者 松根 松事
〔卷一三・三三三五八〕

都我 能 不 能 伊 也 繼 尔 松 根 能 絶 事 奈 久 青 丹 余 志 奈 良 能 京 師 尔
〔卷二・一四二六六〕

アキノネノ (二例)
葦根之 勲 念 而 結 義 之 玉 緒 云 者 人 解 解 八 方
〔卷七・二二三四〕

ヤマサガノネノ(三例)

足槍木之 山菅根之 戀 吾波曾流流 君之光儀平
足槍木乃 山菅根之 戀 不止念者 於妹將相可聞
三芳野之 真木立山尔 青生 山菅之根乃 戀 吾念君者

アカネサス・アカネサシ(八例)

壺安乃 御門之原尔 赤根刺 日之辰 鹿自物 伊波比伏管
大伴乃 見津跡者不云 赤根指 照有月夜尔 直相在登聞
長谷弓 榻下 吾戀在妻 赤根刺 所光月夜迹 人見点鳴
赤根指 日之暮去者 為便乎無三 千遍嘆 而恋乍曾居
指易而 将宿君故 赤根刺 昼者終尔 野于玉之 夜者須稍
玉田次 不懸時無 吾念 妹西不念彼 赤根刺 日者之弥良尔 鳥玉之 夜者醉辛 二 眠不睡尔
妹恋丹 生流為便無

飯喫隨 味母不在 雖行性 安久毛不有 赤根佐須 君之情志 忘可祈津瀬
嬬婦良我 珠貴麻泥尔 赤根刺 晝波之亮良尔 安之比奇乃 八丘飛越 卷一九四一六

タマチネノ(七例)
語而 立西日從 帶乳根乃 母之命者 齋后乎 前坐置
足乳根乃 母之其業 桑尚 願者尔 著當云物乎
垂乳根乃 母之命乃 言尔有者 年緒長 憑過武也
玉垂 小簾之寸鴉吉仁 入通來根 足乳根之 母我問者 風跡將申
垂乳根乃 母之手故 如是許 無為便事者 未為国
足千根乃 母尔障良婆 無用 伊麻思毛吾毛 事成成
誰乃 吾屋戸來喚 足千根乃 母尔所噴 物思吾呼
足千根乃 母尔不知 吾持留 心者吉惠 君之隨意
垂乳根乃 母白者 公毛余毛 相扇羽梨丹 年可經
如是耳 恋者可死 足乳根之 母毛皆都 不止通為

垂乳根之 母我養翁乃 眉隱 馬聲蜂音 石花蜘蛛 鹿異母 二不相而 卷二二二九九
足千根乃 母之召名乎 雖白 路行人乎 跡孰知而可 卷二二二二〇
天地丹 思足椅 帶乳根笑 母之養蚕之 眉隱 氣衝渡 吾恋 心中少 人丹言物西
不有者 松根 松事

足千根乃 母尔毛不謂 畏有之 心者縱 公之隨意
卷一三三三八五

サネカカラ(二例)

天飛也 輕路者 吾妹兒之 里尔思有者 戀 欲見騰 不已行者 人自平多見 真根久住者
人応知見 狹根 後毛將相等 大船之 思慮而 玉蜻 磐堤潮之 隨耳 恋管在尔 度日
乃 晚去之如 照月乃 雲隱如 奥津濶之 名延之妹者 黄葉乃 過伊去等 玉梓之 使之言者
梓乃 声尔聞而 一云 將言為便 世武為便不知尔 声尔乎 聞而有不得者 吾恋 千
重之 一隔毛 遺閑閑 精毛有八等 吾妹子之 不止出見之 輕市尔 吾立聞者 玉手次 歎火乃
山尔 喧鳥之 音母不所聞 玉梓 道行人毛 独谷似之 不去者 為便乎無見 妹之名喚而 袖
曾振鶴 或本 有謂之名耳 聞而有不得者

アリネヨシ(二例)
在根良 对馬乃波 々中尔 弊改一向而 早速還年 卷一六二
吾欲之 野島波見世追 底深伎 阿胡根能浦乃 珠曾不拾 或張云 吾根 子 扇羽見通
二芳野之 青根我峯之 蘿席 雖將織 経緯無二 卷七二二〇
高山波 雲根火雄男志等 耳梨与 相諍說伎 神代從 如此尔有良之 古昔母 然尔有許言 虚彈
毛 嬌乎 相裕良思吉 卷一三二二
足柄乃 宮根飛超 行鶴乃 乏見者 日本之所念 卷七二二七五
築羽根 冊耳見乎 有金手 雪消乃 道矣 名積來有鴨 卷三三八三
筑波根尔 吾行利世波 霍公鳥 山崩見令響 鳴麻志也其 卷八二四九七

ネモロコあるいはネモロゴロ(全五例)
押照 雖波乃 菅之 根毛許呂尔 君之開四手 年深 長四云者 真十鏡 磨師 情乎 縦手師
其日之極 浪之 輝 珠藻乃 云々 意者不持 大船乃 憑有時丹 千響成 神哉將 離空
鯉乃 人欺禁良武 通為 君毛不來座 玉梓之 使母不所見 成奴 礼婆 痛毛為 便無三 夜于玉
乃 夜者須我良尔 赤羅引 日母至 閨 雖嘆 知師乎無三 離念 田付乎白二 幼婦常 言雲知

その他
卷一三三三八四
卷一六三三八一
卷一九四二四

卷二二二九九
卷二二二二〇
卷一三三三八五

卷一三三三八五
卷一三三三八五

卷一三三三八五

久手小童之哭耳泣管 徘徊 君之使乎 待八兼手六

河蝦鴨 六田乃河之川揚乃 根毛居離見 不飽河鴨

血沼之海之塩干能小松 一极母己呂尔 恋屋度 人兒故尔 (卷一・一四八或本歌)

普根之根毛 一伏三向羅呂尔 吾念有 妹尔縁而 (卷一三・三三八四)

於保支能能 末支能末尔々々 等里毛知氏 都可布流九尔能 年内能 許登可多弥母知 多末

保許乃 美知尔伊天多知 伊波弥布美 也未古衣野由支 弥夜故尔 末為之和我乎 安良多

末乃 等之由吉我整理 月可佐弥 美奴日佐末弥美 故敷流管良 夜須久之安良弥波 保止々支

須支 矣久五月能 安夜女具佐 余母疑可豆良氏 左加美都伎 安蘇比奈具礼止 射水河雪消

溢而 逝水能 伊夜未思尔乃未 多豆我奈久 奈與江能須氣能 根毛己呂尔 於母比率須保礼

奈介伎都々 安我末川君我 許登乎波里 可敵利未可利天 夏野乃 佐田利乃波奈能 花咲尔

々布尔惠美天 阿波之多流 今日乎波自米氏 鏡奈須 可久之都弥見 於手我波利世須 (卷一八・四一六)

〔葉根〕 (二例)

葉根 今為妹乎 夢見而 情内一恋渡鴨 (卷四・七〇五)

葉根 今為妹者 無四呼 何妹其幾許恋多類 (卷四・七〇六)

三借訓字の根

植物を意味する語で正訓字のものに傍線 地名・枕詞にあてられているものに破線を付した。また音字のものはゴシック体で示す。

(一) 名詞の一部に使用されるもの (二例)

芝付乃 御宇良佐奈流 根都古具佐 安比見愛安良婆 安尔古非米夜母 (卷一四・三五〇)

於伎敵欲里 美知久流之保能 伊也麻之尔 安我毛布支見我 弥不根可母加札 (卷一八・四〇五)

(二) 形容詞の一部に使用されるもの (二例)

天飛也 輕路者 吾妹兒之 里尔思有者 慙 欲見 騰 不己行者 人目乎多見 真根久往者

人応知見 狭根葛 後毛将相等等 大船之 思憑而 玉崎 磐垣淵之 隠耳 恋管在尔 度日

乃 晚去之知 照月乃 雲隠如 奥津藻之名 延之妹者 黄葉乃 過伊去等 玉梓之 使之言者

梓弓 声尔聞而 一云 声耳聞而 将言為便 世武為便不知尔 声耳乎 聞而有不不得者 吾恋 千

重之隔毛 遣悶流 情毛有八等 吾妹子之 不止出見之 輕市尔 吾立聞者 玉手次 歎火乃

山尔 喧鳥之音 母不所聞 玉梓 道行人毛 独谷 似之不去者 為便乎無見 妹之名喚而 袖

會振鶴 或本 有謂之名耳 聞而有不不得者句 (卷二・二〇七)

希求の終助詞 (一例)

籠毛与 美籠母乳 布久恩毛与 美夫誓志持 此岳尔 染探須兒 家告閑 名生紗根 (卷一・一一)

：荒浪 風尔不台遇 朝見管 身疾不有 急 今要賜根 本国都尔 (卷六・一〇一〇、一〇一一)

於君似 草壁見從 我懐之 野山之淺芽 入莫折根 (卷七・二三四七)

朝菱吉 木方性君我 信土山 結瀝今日 曾 雨莫香根 (卷九・二六八〇)

願鳴之 来喧幸日 及 見乍將有 此芽子原尔 雨勿香根 (卷一〇・二〇九七)

白露尔 荒争金手 吹芽子 散惜兼 雨莫香根 (卷一〇・二一六)

春日野之 芽子落者 朝東 風尔副而 此間尔 落耳根 (卷一〇・二二二五)

色付相 秋之露霜 莫香根 妹之手本乎 不總今夜者 (卷一〇・二二二五)

新室 暎重葎迹 御座給根 草如 依逢未通女者 公 隨 (卷一一・一三三五)

玉垂 小簾之寸鷗吉 入 通来根 足 乳根之 母我問者 風跡将申 (卷一一・一三六四)

奥山之 真木乃板乎 押開 恩草也 出来根 後者何將為 (卷一一・二五一九)

(三) 付属語またはその一部に使用されるもの

助詞が不で使用されるもの (一例)

梅花 吾者不台落 青丹吉 平城之人 来管見之根 (卷九・一九〇六)

打消の助動詞ズが已然形で使用されるもの (二例)

多氣婆奴礼 多香根者 長寸 妹之髮 此来不見尔 挿入津良武者 (卷二二・二二二二)

(四) イモチネで使用されるもの (二例)

小垣内之 麻矣引干 妹名根之 作服異六 白細乃 紐緒毛 解 一重結 帶矣 三重結 吉伎尔

仕奉而 今谷袋 因尔 退而 父妯毛 妻矣 毛 将見跡 思 仁 往那 牟君者 鳥 鳴 東 国 能

恐 耶 神之三坂尔 和臺乃 服 寒等 丹 鳥 玉乃 髮者 乱而 邦 間跡 因矣 毛 不告 家 間跡 家

矣 毛 不云 益 荒夫乃 去 能 進尔 此 間 假有 (卷九・一八〇〇)

(二〇一七年庶草業生 中日日本炉工業株式会社)